

その他

2015年度オープンキャンパスにおける自ら学ぶ意欲を持つ 受験生獲得に向けた看護学科「高齢者体験」企画の実施

Practical report of elderly simulation experience toward acquiring test-takers with motivation to self-learning at the 2015 college's day by nursing course

寺尾洋介 平田美和 菱沼由梨 原田竜三 高野海哉 富岡晶子

Yosuke TERAOKA, Miwa HIRATA, Yuri HISHINUMA, Ryuzo HARADA, Kaiya TAKANO, Akiko TOMIOKA



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈その他〉

2015年度オープンキャンパスにおける自ら学ぶ意欲を持つ 受験生獲得に向けた看護学科「高齢者体験」企画の実施

Practical report of elderly simulation experience toward acquiring test-takers with motivation to
self-learning at the 2015 college's day by nursing course

寺尾洋介¹ 平田美和¹ 菱沼由梨² 原田竜三¹ 高野海哉¹ 富岡晶子¹

1 東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

2 首都大学東京 健康福祉学部 助産学専攻科

Yosuke TERAOKA¹, Miwa HIRATA¹, Yuri HISHINUMA², Ryuzo HARADA¹, Kaiya TAKANO¹, Akiko TOMIOKA¹

1 Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

2 Graduate Program of Midwifery, Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

要 旨：2015年度オープンキャンパス看護学科企画として、看護学科入試・広報委員会の活動目標の一つである「自ら学ぶ意欲を持つ」受験生の獲得につなげたいと考え、「高齢者体験」を実施した。そこで、体験企画の参加者の学びや感想から「どのように看護に関心が向けられたか」という視点から活動を評価したいと考えた。

企画には45名が参加し、体験後の学びや感想を分析した結果、【高齢者体験による感情表出】【高齢者体験による自己体験の想起】【高齢者理解の深化】【高齢者への関わり方の発展】【高齢者の生活の質向上の理解】の5つのカテゴリーに整理された。結果より本企画への参加者が、看護の対象とケアに関心が向いたと考察する。

今後、本企画が高齢者体験をした参加者の入学への動機づけや自ら学ぶ意欲にどう影響したかの評価が課題となった。本学で看護を学ぶ魅力を伝え、自ら学ぶ意欲を持つ学生の獲得に向けた入試広報活動のあり方が示唆された。

キーワード：オープンキャンパス、看護学科、高齢者体験

Keywords：the college's day, nursing course, elderly simulation experience

I. はじめに

少子化を背景に、我が国は大学全入時代となった。その一方で看護系大学は、新設および定員増のラッシュを迎え¹⁾、看護学部・看護学科を有する多くの大学が優秀な受験生の獲得に力を入れている。「オープンキャンパス」(以下、OCとする)は、大学等が構内を公開し、学校説明会を開き、受験生が構内を見学し、模擬講義を体験できる試み²⁾であり、大学が受験生・入学者を確保するための戦略となっている³⁾。

東京医療保健大学においても受験生の獲得に力を入れており、毎年、大学入試広報部を中心に、OC、進学ガイダンス、個別見学会などを企画・開催している。医療保健学部看護学科(以下、看護学科とする)にお

いては、看護学科入試・広報委員会(以下、看護学科委員会とする)を中心に、これらの大学企画に参画し、看護学科受験生の獲得に力を入れてきた。特に看護学科委員会では、進路の決定に悩む高校生を対象に看護学への興味・関心を高めること、また、志望校の選択に悩む受験生に看護学科の魅力伝え看護学科への受験や入学を動機づけることを狙う好機として、OCを重要視し、その活動に力を注いできた。

例年7月に世田谷キャンパスで開催されるOCでは、看護学科委員会が企画を考案し、高校生とその保護者が「看護を学ぶ」実体験を得られること、看護学科教員や在校生が高校生、保護者と直接言葉を交わし看護学科の魅力伝えることを意図して、「基礎看護技術体験(手洗い・手指消毒)」や「赤ちゃんケア(新生児オ

ムツ交換・尿量測定)」などの体験型企画を開催してきた。体験型企画は入学前から学習の動機づけとなることが示されており⁴⁾、看護に対する関心を高め、看護学科への入学意欲を高めることをねらいとしている。具体的には、入学前の看護体験企画が、看護の対象となる人々や看護を学ぶことへのイメージ化を促し、看護者に求められる態度、技術の学習の動機付けにつながる⁵⁾ことが示されている。つまり、入学前の体験企画が看護への関心を高め、受験生の自ら学ぶ意欲に繋がると考えた。さらに、2015年度のOCにおいては、看護学科委員会の活動目標の一つである「自ら学ぶ意欲を持つ学生を獲得する」ことをふまえ、「高齢者体験」を企画した。高齢者体験では、加齢に伴う身体的変化を体験し、看護の対象者への理解を深めることに加え、高齢者が持つ不自由さを補完するだけでなく、出来ること、強みを生かした看護について、教員、在学生らとともに考えることを体験できる企画とすることで、「自ら学ぶ意欲を持つ」受験生の獲得に繋がりたいと考えた。

そこで本稿では、看護学科「高齢者体験」企画の参加者の学びや感想から「どのように看護に関心が向けられたか」という視点で活動を評価し、入試広報活動の成果と今後の課題について考察したので報告する。

II. 看護学科企画「高齢者体験」の概要

1. 開催日時

平成27年7月18日 11時～16時

2. 企画運営担当者

看護学科入試・広報委員の6名が企画運営を担当した。また、当日の運営は本学在学生（4年次生）5名の協力を得た。

3. 企画の内容

「高齢者体験」企画は、①導入の講義②実際の高齢者体験③グループワーク④まとめで構成し、実施した。企画の流れを表1に示す。

①導入の講義は、高齢者体験を行う前に、日本の高

齢者を取り巻く社会的動向や加齢に伴う心身の変化など、基本的な知識を提供し、参加者が高齢者の体験を具体的に理解できることを目的に実施した。

②実際の高齢者体験では、参加者が視聴覚・手指巧緻動作・下肢（歩行）体験の3ブースから1つを選択し、高齢者体験を実施できるようにした。ブース選択後、参加者に、高齢者疑似体験セットを装着してもらい、その時に感じる不自由さや、自助具（箸や杖等）を使用してもらった時の不自由さが軽減される感覚の違いを体験できるようにした。

③グループワークでは、まず、体験後すぐに参加者に感想を述べてもらった。次に、教員や協力が在学生が実習で学んだ高齢者の不自由さとできる事や強みについて語った。その上で、参加者が体験と高齢者の日常生活への影響について繋げて考えられるように教員や協力が在学生らが関わった。その後、高齢者体験の感想を付箋に記載してもらった。

④まとめでは、高齢者のからだにどのような変化が起きているのか、より具体的な解剖学的な説明と、高齢者の対象理解の視点やケアについて説明を行った。参加者が体験したことが何故起こるのか、高齢者の対象理解やケアの視点について、参加者の高齢者体験と知識を繋げ、高齢者への看護についてさらに考えてもらえるようにした。

尚、グループワークで感想を付箋に記載してもらう際に、他のOC来場者にも企画に関心を持ってもらうために、会場入り口のホワイトボードに付箋を掲示させて頂く旨を伝え、感想の付箋への記載は参加者の任意である事を保証した。

III. 結果

1. 参加者の反応

企画の参加者総数は45名（受験生と保護者の内訳は不明）であった。高齢者体験を実施した受験生とその保護者からは「感覚が鈍い」「おじいちゃん・おばあちゃんってこんな感じなんですね」といった声が聞かれたり、視野がさらに狭くなることで、歩くこと自体こんなに怖いことなのかと驚く様子が見られた。また、

表1 「高齢者体験」企画の流れ

企 画		概 要
導入の講義（5分）		高齢者の定義、社会構造の変化、高齢者の身体的特徴について
体験（10分）	視聴覚体験	・白内障ゴーグル、耳あて装着による視力、聴力変化の体験
	手指巧緻動作体験	・手袋、サポーターを装着し、巧緻動作の実施（鉛筆をつかむ、箸を使用し乾燥大豆を移動する）
	下肢（歩行）体験	・おもり付ベスト、下肢サポーター、足関節おもり装着による歩行・日常生活動作の体験
グループワーク（15分）		・感想を述べたり、高齢者の出来ること、強み等を教員・在学生らと考える ・感想を付箋に記載
まとめ（10分）		膝関節に焦点を当てた解剖生理学・歩行時の不自由を軽減し、高齢者の強みを生かす看護の解説・まとめ

保護者からは「子どもと高齢者の体験を共有することで、今後の進路を決定していく上で参考になった」「祖父母等、身近な高齢者への関わり方を学んでくれたら」との感想も挙げられた。企画の実際の様子を写真1、2で示す。写真1は参加者が下肢（歩行）体験用装具を協力在学学生と共に装着している場面であり、写真2は参加者が、手指巧緻動作体験後の感想を教員と話している場面を示している。



写真1 参加者が下肢（歩行）体験用装具を装着している場面



写真2 参加者が体験後の感想を教員に伝えている場面

2. 「高齢者体験」における参加者の体験

企画の参加者にグループワーク時に記載してもらった31枚の付箋（無記名）から、「高齢者体験」において参加者が体験した内容を質的に整理した結果、43コードを抽出した。抽出したコードの類似性および特異性を明らかにしながら類別し、類似したコードの特性を明らかにして16サブカテゴリーを抽出した。さらに、【高齢者体験による感情表出】、【高齢者体験による自己体験の想起】、【高齢者理解の深化】、【高齢者への関わり方の発展】、【高齢者の生活の質向上の理解】、の5カテゴリーを抽出した（表2）。

尚、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは< >、

コードは「 」(斜体)で記す。

1) 【高齢者体験による感情表出】

【高齢者体験による感情表出】は、<高齢者の出来ないことへの驚き>、<高齢者の生き方への驚き>、<高齢者体験による肯定的感情>、<高齢者体験による切ない感情>の4サブカテゴリーから構成されていた。

実際に高齢者体験をすることで、参加者は「**高齢者の見えにくさに驚いた**」、「**自分が思っていたより高齢者の手の感覚が鈍いことに驚いた**」といった<高齢者の出来ないことへの驚き>や、「**高齢者が大変な思いをしながらも楽しく、明るく生きていることがすごいと思った**」といった<高齢者の生き方への驚き>を感じていた。また、「**普段、経験したり想像することができない体験ができた**」、「**高齢者体験を大学での今後の学びにいかしたい**」といった<高齢者体験による肯定的感情>や、「**高齢者体験をして素直に切なくなった**」といった<高齢者体験による切ない感情>を体験していた。

2) 【高齢者体験による自己体験の想起】

【高齢者体験による自己体験の想起】は、<自分の出来ることの貴重さの発見>、<自分の将来像の発見>の2サブカテゴリーから構成されていた。

高齢者体験により高齢者を理解していく上で、「**高齢者体験から、いつも自分のしている動作がとても貴重に思えた**」といった今の自己体験と重ね合わせて、<自分の出来ることの貴重さの発見>をしていた。また、「**今は高齢者の不自由さを理解できなくても年を重ねていくことで不自由さを感じていくことを深く知ることができた**」といった将来の自己体験と重ね合わせて、<自分の将来像の発見>をしていた。

3) 【高齢者理解の深化】

【高齢者理解の深化】は、<高齢者の困難さの理解>、<高齢者の気持ちの理解>、<高齢者のからだの理解>、<高齢者の体験の理解>、<身近な高齢者の想起による理解>

の5サブカテゴリーから構成されていた。

<高齢者の困難さの理解>では、「**今日の自分のできている当たり前のことが高齢者にとっては難しいことがわかった**」、「**自分が思っている以上に高齢者の大変さが実感できた**」といった高齢者が生活する上での困難さを最も多くの参加者が理解していた。さらに、実際に高齢者体験をすることで、<高齢者の気持ちの理解>、<高齢者のからだの理解>、<高齢者の体験の理解>といった様々な視点から高齢者を理解すること

表2 「高齢者体験」における参加者の体験

カテゴリー (5)	サブカテゴリー (16)	コード (43)
高齢者体験による感情表出	高齢者の出来ないことへの驚き	高齢者の見えにくさに驚いた 自分が思っていたより高齢者の手の感覚が鈍いことに驚いた
	高齢者の生き方への驚き	高齢者が大変な思いをしながらも楽しく、明るく生きていることがすごいと思った
	高齢者体験による肯定的感情	高齢者体験ができてよかった 高齢者の体験ができてよかった 普段、経験したり想像することができない体験ができた 高齢者体験を大学での今後の学びに生かしたい
	高齢者体験による切ない感情	高齢者体験をして素直に切なくなかった
	自分の出来ることの貴重さの発見	高齢者体験から、いつも自分のしている動作がとても貴重に思えた
高齢者体験による自己体験の想起	自分の将来像の発見	今は高齢者の不自由さを理解できなくても年を重ねていくことで不自由さを感じていくことを深く知ることができた 自分の手を動かさなくなったら自助具がほしいと思った
	高齢者の困難さの理解	高齢者が大変な思いをしていることを知ることができた 今日の自分のできている当たり前のことが高齢者にとっては難しいことがわかった 高齢になると聴覚や視覚が低下することは知っていたが、体験によりその大変さを実感した 日常生活が困難で大変なことがわかった 高齢者が感じている重さや大変さなどが自分のからだで体験でき、勉強になった 高齢者の日常生活での大変さがわかった 高齢者の手の使いづらさに加えて、筋力低下も考えられるため、大変であると思った 高齢者は少しの動作が負担であることがわかった 高齢者体験から、高齢者の大変さがわかった 自分が思っている以上に高齢者の大変さが実感できた 高齢者体験から、高齢者がこのような状況で日常生活を送っていることがわかった
高齢者理解の深化	高齢者の気持ちの理解	普通では体験できない高齢者の気持ちが体験できた
	高齢者のからだの理解	高齢者のからだを理解することができた
	高齢者の体験の理解	高齢者の体験していることがわかった
	身近な高齢者の想起による理解	自分の祖父は元気であるが私たちより大変であることがわかった 自分の祖父の見え方や聞こえ方がわかった 高齢者体験から自分の祖母のがんばりを実感できた
	高齢者との関わりの大切さの理解	高齢者とのコミュニケーションの大切さがわかった
高齢者への関わり方の発展	高齢者への関わり方の考案	高齢者を大事にしようと思った 困っている高齢者を見かけたら手伝いをしようと思った 高齢者体験からわかることが多くあり、今後の接し方や話し方に気をつけてみようと思った 私もそのような患者さんに関わりたと思った
	高齢者の出来ることを支える援助の大切さの理解	便利な道具の大切さをだけでなく、高齢者のできることを伸ばす大切さを知ることができた 自分でできることは自分でできるように見守ることがわかった 高齢者をサポートするだけでなく、できることを伸ばすことも看護であることが知れてよかった 高齢者のできることを伸ばすことに共感できた
	自助具使用による高齢者の生活の変化	高齢者を補助する器具があることを知らなかった 自助具を使用すると少しの力でつかむことが出来るので便利であると思った 自助具を使用するとつかみやすかった 自助具の使用により、高齢者の生活の手助けになることがわかった 高齢者体験から、自助具の使用によりつかみやすくなることがわかった
高齢者の生活の質向上の理解	自助具開発の提案	もっと良い器具が開発されると良いと思った

につながっていた。また、＜身近な高齢者の想起による理解＞では、「自分の祖父は元気であるが私たちより大変であることがわかった」、「高齢者体験から自分の祖母のがんばりを実感できた」といった自分の身近な高齢者を想起することで高齢者の理解を深めることにつながっていた。

4) 【高齢者への関わり方の発展】

【高齢者への関わり方の発展】は、＜高齢者との関わり方の大切さの理解＞、＜高齢者への関わり方の考案＞、＜高齢者の出来ることを支える援助の大切さの理

解＞の3サブカテゴリーから構成されていた。

参加者は高齢者体験をすることで、「高齢者とのコミュニケーションの大切さがわかった」といった＜高齢者との関わり方の大切さの理解＞を通して、＜高齢者への関わり方の考案＞をすることにつながっていた。「困っている高齢者を見かけたら手伝いをしようと思った」、「高齢者体験からわかることが多くあり、今後の接し方や話し方に気をつけてみようと思った」といった具体的な高齢者への関わり方を考案していた。さらに、＜高齢者の出来ることを支える援助の大切さの理解＞では、「自分でできることは自分でできるよう

に見守ることがわかった」、「高齢者をサポートするだけでなく、できることを伸ばすことも看護であることが知れてよかった」、「高齢者のできることを伸ばすことに共感できた」といった高齢者への関わり方を通して、高齢者の出来ることを支える援助の大切さを理解していた。

5) 【高齢者の生活の質向上の理解】

【高齢者の生活の質向上の理解】は、＜自助具使用による高齢者の生活の変化＞、＜自助具開発の提案＞の2サブカテゴリーから構成されていた。

高齢者体験の中で、自助具を使用することを通して「自助具の使用により、高齢者の生活の手助けになることがわかった」、「高齢者体験から、自助具の使用によりつかみやすくなることがわかった」といった高齢者が自助具を使用することで高齢者自身が出来ることが増えることを理解し、＜自助具使用による高齢者の生活の変化＞を理解することにつながっていた。さらに、「もっと良い器具が開発されると良いと思った」といった＜自助具開発の提案＞まで高齢者体験から発展させていた。

IV. 考察

結果を基に、企画の成果、及び今後の課題と入試広報活動への参画のあり方について考察する。

1. 高齢者体験を通して、看護の対象へ関心が向くこと

高齢者体験を経験した参加者は、＜高齢者の生き方への驚き＞や＜高齢者の出来ないことへの驚き＞を含む【高齢者体験による感情表出】を行っていた。同時に＜自分の出来ることの貴重さの発見＞や＜自分の将来像の発見＞を含む【高齢者体験による自己体験の想起】を行っていた。これらは、参加者にとって未知な体験をしている高齢者の体験を経験することによって、参加者が表出した反応と捉えることが出来る。体験型企画は、参加者自身が、看護の対象の体験を体感すると同時に、その体感から得た気づきが体験者の情動を刺激することが示されている⁶⁾。本企画の参加者は、高齢者体験を通して自身の情動が刺激されることで、【高齢者体験による感情表出】を経験する。そして、参加者が高齢者と自分を相対化し、高齢者に対する自分の認識を再確認することで、【高齢者体験による自己体験の想起】という、高齢者理解への契機となる想起を促したのではないかと推察する。【高齢者体験による感情表出】や【高齢者体験による自己体験の想起】をすることで、参加者自身が高齢者をどのように捉えてい

るか、高齢者に対する自身の認識を再確認する。その認識の再確認が契機となり、参加者は、身近な高齢者へ思いを寄せたり、自身が今、健康であること、自分も高齢者になっていく将来像を描く。このように、高齢者の体験を自身に引き寄せて考えることで、「自分の祖父は元気であるが私たちより大変であることがわかった」「高齢者体験から自分の祖母のがんばりを実感できた」など、参加者各々が様々な視点から＜身近な高齢者の想起による理解＞等を含む【高齢者理解の深化】に至った、と推察する。自分以外の人格を理解し、ケアしようとするとき、内面を理解しようすること、つまりその人の世界に“入り込んで”いくことが重要である⁷⁾ことが示されている。同時に相手を理解するから自分を見失うわけではなく、自分のアイデンティティも保ちながら相手を理解していくことで対象への理解がより深まっていくこと⁸⁾も示されている。だからこそ、参加者は、【高齢者体験による感情表出】や【高齢者体験による自己体験の想起】という自分自身の情動を確認する行為を行いながら、他者である高齢者の中に“入りこんで”【高齢者理解の深化】という対象を理解することに至ったと考える。つまり、高齢者体験を通して、看護の対象へ関心が向いた、と考察する。

2. 高齢者体験を通して看護の対象のケアに関心が向くこと

【高齢者理解の深化】を通して、参加者は【高齢者への関わり方の発展】をさせていた。さらに、【高齢者への関わり方の発展】から一步踏み込み、【高齢者の生活の質向上の理解】に至っていた。体験型企画は、参加者に気づきや動機づけを促し、相手を大切にすることに関わり方に繋がることを示されている⁹⁾。更に、だからこそ、参加者は【高齢者理解の深化】を通して、「高齢者体験からわかることが多くあり、今後の接し方や話し方に気を付けてみようと思った」「高齢者のできることを伸ばすことに共感できた」といった、【高齢者への関わり方の発展】や「自助具を使用すると少しの力でつかむことが出来るので便利であると思った」といった、自助具を活用した【高齢者の生活の質向上の理解】といった対象へのケアの視点にまで考えが及んでいた。

つまり、【高齢者理解の深化】を通して、【高齢者への関わり方の発展】【高齢者の生活の質向上の理解】という看護の対象のケアに関心が向いた、と考察する。

3. 本企画のねらいに対する成果

本企画では、高齢者体験直後にグループワークを行い、教員や協力が在学生とともに、参加者が体験と高齢

者の日常生活への影響について繋げて考えられるように工夫した。その工夫により、看護の対象をより身近に感じてもらうことや、看護の対象へのケアについて自らどうすればよいか、参加者自身に引き付けて考えてもらうことが出来たと考える。このような工夫をした本企画は、参加者に、看護の対象とケアへの2つの関心を向けることができたと考察する。

4. 本企画の課題と今後の入試広報活動への参画のあり方

看護学科「高齢者体験」企画を通して、参加者に看護の対象やケアに関心を向けてもらう点では成果があった。一方、この企画が、我が大学に「自ら学ぶ意欲を持つ学生を獲得する」ことに直接繋がったか、までは今回の分析から評価することは出来ない。引き続き、受験者数の推移や、新入学生を対象としたアンケートやインタビューなどで、看護学科「高齢者体験」企画が本学への入学の動機づけや学生の自ら学ぶ意欲にどのように影響したか、評価を行うことが今後の課題である。

最後に、本企画を実施するにあたり、看護学科教員が主体的に企画運営を行えたこと、4年次在学生らの積極的な協力を得られたことも、本企画の成果の一つと言える。今後も受験生らに本学での看護の対象理解やケアについて学ぶことの魅力を伝えながら「自ら学ぶ意欲を持つ学生を獲得する」ために、協力が在学生や入試広報部と連携しながら、看護学科教員として主体的に入試広報活動に参画していくというあり方が不可欠であると考えられる。

V. 結論

2015年度オープンキャンパスにおいて、自ら学ぶ意欲を持つ受験生獲得に向けた看護学科「高齢者体験」企画を実施した。

結果、参加者の体験は「高齢者体験」参加者の体験

より、【高齢者体験による感情表出】【高齢者体験による自己体験の想起】【高齢者理解の深化】【高齢者への関わり方の発展】【高齢者の生活の質向上の理解】の5つのカテゴリーに整理された。

結果より、参加者へ「高齢者体験」企画が看護の対象へ関心が向くこと、看護の対象のケアに関心が向くこと、を促す成果があったと考察する。

企画の課題として、高齢者体験に参加した入学後の学生らへの入学の動機づけや自ら学ぶ意欲にどう影響したかの評価が課題となった。今後も看護学科教員、在学生、入試広報部とが連携し、一層本学で看護を学ぶ魅力を伝え、自ら学ぶ意欲を持つ学生」を獲得できるように、入試広報活動への参画のあり方が示唆された。

引用文献

- 1) 旺文社 教育情報センター. 3.3大学に1校が看護学科！「大学と言えば看護」の時代!? 26年度の新増設は“スーパー看護ラッシュ”！ 2014;1-6. http://eic.obunsha.co.jp/resource/pdf/educational_info/2014/0107.pdf
- 2) 三省堂. 大きな文字で読みやすい 三省堂 新カタカナ語辞典. 2006 ; 137.
- 3) 自由国民社. 現代用語の基礎知識. 2015 ; 824.
- 4) 久留島美紀子, 伊丹君和, 本田可奈子, 江藤美和子, 豊田久美子, 森下妙子. オープンキャンパスにおける模擬演習の試みー基礎看護領域の実践ー. 人間看護学研究 2007 ; 5 ; 121-136.
- 5) 内山久美, 大沢早苗, 横山孝子. 職業的社会科と看護学生の意識 - オープンキャンパス参加者の入学後の「看護イメージ」から -. 保健科学研究誌 2005 ; No2 ; 79-85.
- 6) 前掲5) 82.
- 7) ミルトン・メイヤロフ. ケアの本質 生きることの意味 初版. ゆみる出版 2006 ; 93.
- 8) 前掲7) 94.
- 9) 前掲5) 82.